

児童文章史の一考察

— 暑中休暇日誌を中心に —

野地潤家

20日、岩波書店刊〈解説、二三九頁〉と述べられているように、千葉省三にとっても注目すべき作品となっている。

明治期以降、大正期・昭和期（戦前・戦後）それぞれに、大人によって児童のための暑中休暇物語が作られたり、児童の手によって暑中休暇日誌がつけられたりしている。そこに成人の手になる、児童のための文章表現から、子ども自身の手になる、児童の文章表現へと推移していく、一つの系譜を見出すこともできる。

明治中期、大江小波によって著された、「暑中休暇」（どようやすみ）は、明治二五年（一八九二）九月一三日に博文館から刊行された。ついで、明治後期には、芦田恵之助によって、「学童暑中休暇日誌」（明治41年6月30日、目黒書店刊）がまとめられた。これらはいずれも、作家（巖谷漣山人）や現職の小学校教師による創作であって、子どものための暑中休暇物語となっている。

大正後期には、千葉省三によって、「とらちゃんの日記」（大正一四年（一九二五）、児童文学誌「童話」九月号に掲載、発表当時は「虎ちゃんの日記」）が書かれた。「とらちゃんの日記」は、「作者の代表作で、また、日本のリアリズム童話の傑作といわれている。小学校六年生のとらちゃんの夏休みの生活を、日記の形で書いたものです。」（岩波少年文庫「とらちゃんの日記」〈昭和35年6月

このようにたどってみると、明治期以降現在まで、わが国における児童の夏休みの生活をこまかく生き生きと表わした、暑中休暇日誌には、(1)「暑中休暇」（大江小波著、明治25年9月、博文館刊）↓(2)「学童暑中休暇日誌」（芦田恵之助著、明治41年6月、目黒書店刊）↓(3)「とらちゃんの日記」（千葉省三作、大正14年9月、「童話」掲載）↓(4)「ぼくの太平洋大航海」（岡本篤著、昭和55年3月講談社刊）のように、時をへだてながらではあるが、一つの系譜を見出すことができる。

二

(1) 「暑中休暇」（どようやすみ） 大江小波著 明治25年9月14日 博文館刊

本書は叢書「少年文学」のうち、第十三編に入っている。「暑中休暇」が刊行された時点で、すでに刊行されていたのは、第一編「がね丸」(巖谷漣山人著、武内桂舟画)、第二編「二人むく助」(尾崎紅葉著、武内桂舟画)、第三編「今辨慶」(江見水蔭著、武内桂舟画)、第四編「維新三傑」(北村紫山著、石版画)、第五編「雨の日ぐらし」(山田美妙著、富岡永洗画)、第六編「宝の山」(川上眉山著、武内桂舟画)、第七編「二宮尊徳翁」(幸田露伴著、小林永興画)、第八編「姉と弟」(嵯峨のや著、富岡永洗画)、第九編「当世少年気質」(巖谷漣山人著、武内桂舟画)、第十編「親の恩」(宮崎三味著、小林永興画)、第十一編「紀文大尺」(村井弦斎著、水野年方画)、第十二編「大石良雄」(原抱一庵著、藤島華徳画)の一二編であり、近刊を予定されていたのは、第十四編「近江聖人」(村井弦斎著、九月下旬出版)、第十五編「伏魔將軍」(石橋忍月著、十月上旬出版)、第十六編「河村瑞賢」(大華山人著、十月下旬出版)の三冊であった。

この叢書「少年文学」は、毎月一回発行、和装美本仕立てであった。第十三編「暑中休暇」は、目次のページの右はしに、「暑中休暇」(当世少年気質の中)とあり、作者巖谷漣山人としては、当世少年気質に焦点づけて描いた意欲的な異色の作品であった。この「少年文学」の作者には、尾崎紅葉をはじめ幸田露伴、江貝水蔭、山田美妙、川上眉山、嵯峨のや、村井弦斎など、当時として一流の作家が動員されている。

「暑中休暇」(当世少年気質の中)は、巻初に、「校長の演説」(筆記)が置かれ、夏休みの有効で有意義な過ごしかたへの導入がなされている。その後は、(一)游泳/(二)復習/(三)端艇/

(四)遠足/(五)旅行/(六)帰省の六章から構成されている。「校長の演説」(筆記)では、暑中休暇に入るに当たって、校長先生が子どもたちに夏休みの過ごし方を説いて聞かせるかたちが行われている。

休暇中は、勉強と遊びとのけじめをつけて過ごすべきこと、「朝は空気も新鮮であり、精神も活潑な時ですから、其時に一時間なり二時間なり時間を極めて、今まで学校で習った事を、忘れない様に復習をする」(同上書、九ペ)ことが説かれている。

さらに、休暇中の遊楽(あそび)としては、まず第一に、旅行がすすめられている。「もう十三四にも成れば、ひとりでも旅の出来ない事はありません」(鎌倉から江の島、大磯位の処なら、直に行かれます)。(同上書、一一ペ)

次には帰省がすすめられている。「此暑中休暇を幸ひに、故国へ帰って其安否を訪ひ、又東京の土産話や、学校で学んだ事杯を咄して聞かして、両親を喜ばせるのも至極善い事であります」。(同上書、一二ペ)

次には、泳ぎ(游泳)に行くことがすすめられている。

次には端艇(ボート)を漕ぎに行くことがすすめられている。「面白い遊楽で、また身軀の爲にも宜敷いから、時々は隅田川や、また品川灣へ出駆て御覧なさい」(同上書、一三ペ)

次には遠足がすすめられている。早朝・夕方などの涼しい時分の朋友二三人との散歩のほか、「殊には入谷の朝顔、不忍の蓮も、丁度今が盛りですから、其処等へ行って御覧なさい! また王子や目黒には滝もあります、一日納涼に行くのも亦悪く無い遊楽です」(同上書、一四ペ)とめずらしい場所への遠足がすすめられている。

「暑中休暇」は、校長先生の夏休みの過ごし方についての話を契機として、(一)游泳、(二)復習、(三)端艇、(四)遠足、(五)旅行、(六)帰省 など、六つの物語から構成されている。

(一)游泳 には、梅島郁太郎(主人公)、その先輩入江浪次郎が登場し、入江に手引きされながら、両親には隠れて水泳ができるようになるいきさつが巧みに描かれている。

(二)復習 には、竹屋不二夫(一三歳、小学校高等科三年、恵まれた家庭の子ども)・松下操一(不二夫と同年齢。父親が亡くなり、母子家庭。三田の精乳舎に奉公。勉強好き・読書好き)が登場する。早朝一時間あまり丸山のベンチに腰を掛け、声に出して本を読むの日課としている不二夫に、牛乳配りをして働いている操一が偶然知り合い、兩名意気投合して仲好しになり、やがては操一が竹屋家に引き取られて通学ができるようになる友情物語である。

(三)端艇 では、川村龍彦はじめ、四人の同級生、岸上・山下・野中・原が登場する。ボート漕ぎは、川村・岸上は経験者、野中と原とは二度目、山下が初めてで、隅田川でのボート漕ぎに馴れない山下を中心起こる、少年たちの喧嘩や和解のことが生き生きと描かれている。

(四)遠足 には、林文治・岡静逸の両少年が登場し、二人で上野不忍池の蓮の花を見るため遠足を試みる。道順は、三番町→靖国神社→富士見町→馬場→銅像(大村兵部大輔)→九段坂→飯田町→三崎町→水道橋→お茶の水→元町東竹町→春木座→切通しの坂→仲町→池の端→東照宮となっている。ここで漢詩好きの林文治は七言絶句一編を作り、昆虫好きの岡静逸は、用意して来た虫籠に、蝶・こおろぎ・こがねむし・かまきり・かぶと虫・ミンミン蝉・キチキ

チばったなど、都合七匹の虫を捕って入れる。

(五)旅行 には、初野民太(二葉小学高等三年生 初野民太へ一三年十月月)のものした、「鎌倉江ノ島紀行」が収められている。小学全課を卒業して、郷里静岡に帰省する友人笈川学君と共に、新橋→鎌倉→旅亭三橋に投宿し、翌日は江の島に向かっていく。友人笈川学君とは藤沢駅で東西に別れ、初野民太は夕方新橋に帰り、帰宅する。文語文で記されており、末尾には、指導者からの批評のこゝとばが添えられている。

(六)帰省 には、笈川学(前出)の静岡への帰郷のことが、初野民太(前出)への書状(候文)のかたちをとって抄録されている。その初めには、作者(大江小波)が次のようにことわっている。

「作者云ふ。此より笈川学が帰省の事を記すべきなれど、奈何せん紙類余す処無く、発免期日亦大に迫りたれば、不得止笈川学が、初野民太に贈れる書状を左に抄録して、僅に其責を塞ぎ、詳細は他日を期して之を報ぜんとす。吾が親愛なる少年諸君、敢て作者が怠慢と思ひたまひそ。あなかしこ。」(同上書、一六〇〜一六一)

暑中休暇中の子どもたちの生活を、「校長の演説(筆記)」に従って、(一)游泳、(二)復習、(三)端艇、(四)遠足、(五)旅行と、力を入れて描いていくうち、予定の紙数を使ってしまい、(六)帰省に至っては、分量上の制約もあって、(五)旅行ともに、小活字で組まれている。全編では四六判一六二ページになっている。

大江小波作「暑中休暇」(どうようやすみ)は、明治二〇年代半ば、当時の小学生たちを主人公として、夏休みにおける児童の生活を主として言文一致体で活写し、興味深い児童読物たりえている点で、注目される。

(2) 「学童暑中休暇日誌」 芦田恵之助著 明治41年6月30日
目黒書店刊

本書の「はしがき」によれば、芦田恵之助（当時、東京高等師範学校訓導、附属小学校勤務）は、イタリアのアミーチスの「クオレ」に触発され、その学童日誌を高く評価し、わが国の児童のために、暑中休暇の生活を取り上げ、「一面には学童がこの休暇を利用するよーにといふ目的をもって、一面には休暇中に於ける学童の感情を純正ならしむるといふ目的をもって」（同上書、「はしがき」、三〜四頁）、この児童物語を著したことがわかる。

芦田恵之助は、杉谷代水氏の翻訳を通じて「クオレ」に接し、それに触発されて、わが国における「クオレ」に当たる学童読物の創作を思い立った。明治三〇年代半ばころから、つまり二〇世紀初頭から児童（学童）読物の創作に思いを潜めていた芦田恵之助は、杉谷代水訳「クオレ」に出会うことよって、一層その意欲を強められた。

「学童暑中休暇日誌」の主人公は、尋常科六年生の春山真しんという男児である。この春山真が「日誌」の筆者となっている。

春山家には、両親のほか、婆やがいる。兄（敏）は京都の高等学校（旧制）に学んでおり、姉（花）はすでに横浜に嫁していて、陸坊という赤ちゃんがいる。主人公春山真（六年生）には、近くに野山（五年生）・杉山（四年生）という友だちがおり、よく春山のうちへあそびに来る。また、同級生としては、川波・岡部・山川・山野などが登場してくる。

春山真の父親は、七月二三日（木）から北海道へ出張し、二六日（日）には函館から無事に着いたとの手紙がくる。やがて八月七日（金）夕方、出張先から帰宅する。京都の高等学校に入学している兄（敏）は、七月二七日（月）帰ってくる。八月九日（日）春山家で催した談話会のおしまいに、兄は「をまきな物語」をしてくれる。

八月二四日（月）、京都へ帰って行く。また、横浜に嫁いでいる姉（花）は、八月五日（水）赤ちゃんの陸坊をつれて里帰りする。やがて八月一二日（水）横浜へ帰って行く。春山家の婆やは、家族同様で、よく春山家に溶け込んでおり、子どもからも慕われている。真と同年の一人子を二歳の折亡くしている。七月三〇日（木）、婆やと谷中の墓地に婆やの坊やお墓参りに行く。また、八月二〇日（木）午後婆やに誘われて浅草に行き本願寺にお参りをし、法話を聴聞したり、観音様にお参りをし、昆虫館にも入ったりする。

この「日誌」の筆者春山真の同級生は、川波・岡部・山川・山野の四名で、川波は休暇中、舞子にかけ、そこから第一信（七月二四日（金））・第二信（八月八日（土））を送ってくる。岡部は尋常科で評判の美術家であり、七月二六日（日）、学校で図画手工の展覧会を開く。八月二三日（日）には、第二回の展覧会を開き、いろいろ趣向を凝らして春山を感心させる。山川は、休暇中、田園生活を送り、第一信を七月三一日（金）、第二信を八月一八日（火）に送ってくる。山川は文語文の名手であり、いずれも文語で手紙をしたためている。八月二五日（火）には、四〇日ぶりに春山の家を訪れる。次に山野は新華族で、八月一六日（日）山野のうちで音楽会を催し、春山真も招かれて出かける。

これらの登場人物のほか、春山真（主人公）の所へは、毎日のよ

うに下級生野山(尋五)・杉山(尋四)の兩名がやってくる。野山は家は豆腐屋で評判の優等生である。杉山は非常に腕白者で交物ではあるが、春山にはよくなつき、毎日九時から一緒に体操をする。後には野山も加わって三人で体操をして楽しむようになる。体操だけでなく、理科の実験を手伝ったり、八月二日(日)には野山も加わって王子の方へ遠足に行ったりする。杉山はまた、八月三日(月)昆虫採集に出かけ、そこで喧嘩をしてしまう。そのほか、八月九日(日)、春山家で開かれた談話会の手伝いをしたり、幼時からかわいがられた春山の姉に朝顔の鉢を持って来たり、親密な生活がつづく。八月一日(月)には、杉山が病気になる、回りの人たちから心配され、親切にされるが、八月九日(水)には元気を回復し、再び三人で朝の体操ができるようになる。八月二十五日(火)ころから天候があやしく、やがて暴風雨になり、多くの被害が出る。旧師中野先生とその生徒たちのため、子どもたちは義捐活動をしたりする。

夏期休暇中、教育招集日(いわゆる登校日)は、八月一日(土)、八月一日(火)、八月二日(金)の三回設けられ、担任の先生から、暑中休暇中の生活指導・学習指導がなされている。

こうして、「学童暑中休暇日誌」は、暑中休暇四三日間、春山家を中心に、学童真は毎日のみずからの生活を記して、単調に流れず変化に富むものとなっている。

毎日朝六時に起床し、朝食の前後に復習を位置づけ、体操をし、家事を手伝い、夜は日記をつけて九時に就床する。この日課を原則として忠実に守らせながら、その間に、父の出張、兄の帰省、姉の里帰り、婆やとの外出、級友からの来信、暴風雨の襲来、水害の義

捐活動などを織りませて、一学童の休暇中の家庭生活を多彩ならしめてている。

「日誌」の筆者としての春山真は、両親・兄弟(甥にあたる隆坊)・婆やに恵まれ、素直に明るく、ユーモアのある、典型的な小学生(学童)として描かれている。日々の学習・運動・手伝い・経験・人間関係を生き生きと楽しんでいる。

「学童暑中休暇日誌」は、芦田恵之助の述作活動の系列としては、「丙申水害実況」(明治30)↓「試験やすみ」(明治35)↓「学童暑中休暇日誌」(明治41)↓「綴方十二ヶ月」(大正6~8)の中に位置づけることができる。対象をリアルに描く修練の基礎は、「丙申水害実況」によって固められ、学童の休暇中の生活を描く呼吸は、「試験やすみ」によって会得され、「学童暑中休暇日誌」は、それらの基礎の上に結実し、「試験やすみ」の発展・拡充せしめられたものといえよう。

ただ、「学童暑中休暇日誌」においては、女兒が一名も登場して来ない。これは大江小波作「暑中休暇」(どようやすみ)も同じであったが、同じ作者の「試験やすみ」にも、「綴方十二ヶ月」にも女兒が二人ずつ登場しているのに比べて、なにか考えるところがあったのかも知れない。

芦田恵之助の「学童暑中休暇日誌」によって、主人公春山真に夏休み中の学習・生活を克明に周密に生き生きと描かせたことは、児童読物の史的展開の上で、また児童の生活の表現の史的展開の上で、注目すべき成果の一つとなっている。

四

(3) 「とらちゃん日記」 千葉省三稿 大正14年9月 「童話」掲載

千葉省三作「とらちゃん日記」(昭和35年6月20日、岩波書店刊)には、初めに、作者が、次のように述べている。

「この日記をかいとらちゃん(引用者注、岡田虎三)は、じつは小さい時のわたしかもしれない。またわたしの知っている、おさな友だちのことかもしれない。

とにかく、まっかな、まるまっちい顔と、じょうぶそうな、日に焼けた手足をもった、尋常六年生ぐらいのいなかの子どもとてくください。ここに出てくるのは、そのとらちゃんの書いた村の地図(引用者、「とらちゃん日記」の題下に、手がきの村の地図が掲げられている)で、日記の中に出てくる場所(引用者注、ボンデン山、草場、新屋敷、大沼、中島、ノダ川、新堀、オレンチへとらちゃんのうち)、ゲンチャンチ(源作君のうち)、トンガリ山、学校など)を、とらちゃんがみなさんによくわかるように、いちいち書き入れたのです。」(同上書、一七六ページ)

千葉省三は明治二五年(一八九二)に栃木県篠井村に生まれた。小学校三年の折、父親の転勤に従って、一家は楡木村(現在は鹿沼市楡木町)に移り住み、ここに二〇年も居たという。従って、千葉省三が小学校の六年生だったころといえ、明治三〇年代も半ばを過ぎた時期にあたる。もっとも、当時は尋常制は四年生までだったから、尋常六年は高等科二年に相当する学年であった。

「とらちゃん日記」には、とらちゃん(岡田虎三)をはじめ、源ちゃん(小山源作)・作ちゃん・喜三ちゃんが登場する。東京から夏休みの間、新屋敷に滞在する敬一君がやって来る。また、角ち

ちゃん・利平・五郎ちゃんのほか、とらちゃんの両親、高木先生・川東の春ちゃん・斎藤先生らが登場する。

とらちゃんが日記をつけているのは、八月一日、四日、五日、一日、一二日、一三日、一四日、一六日、一七日、二〇日、二一日、二五日の計一二日間である。

「とらちゃん日記」では、たとえば、八月一日の日記の書き始めの部分は、次のように記されている。

源ちゃんに作ちゃんに喜三ちゃんにおれと、四人でボンデン山へ草刈りにいった。ゆんべ、雨がふったもんだから、山道がつるして歩きにくかった。それでも、きょうから夏休みなんだと思うと、うれしくってしようがね。

みんな、なにして遊ぼうと、そのことばかりいいあった。新堀へ魚つりいぐことだの、西山へ藍茸とりいぐことだの、中島へ遊びにいぐことだの、いいことばかりで、いくら夏休みが長くっても、そんなにできやしねと思うくらいだ。(同上書、一七六ページ)

「とらちゃん日記」では、村の子どもたち、とりわけ源ちゃんとの山ブドウの縄張りをめぐっての喧嘩と和解が一つの事件として描かれ、一方、東京からやって来て夏休みの間新屋敷に滞在する敬一(敬ちゃん)との交流が生き生きと描かれている。二つの軸を中心に物語は展開させられるが、とらちゃん(岡田虎蔵)の心情は、源作や敬一のかかわりのほか、両親や村の成人とのかかわりを通じて、生き生きととらえられている。

芦田恵之助著「学童暑中休暇日誌」は、春山真という六年生の男児をして、夏休みの生活そのものを克明に正攻法で日記に記させた

ものであったが、千葉省三作「とらちゃんの日記」は、日記形態を導入することによって、とらちゃんを中心とする、六年生くらいの子どもの私たちの夏休みの生活と出来ごとが土地ことばを生かしてみごとに形象化されている。

(1)「暑中休暇」(どようやすみ)大江小波著(明治25)↓(2)「学童暑中休暇日誌」芦田恵之助著(明治41)↓(3)「とらちゃんの日記」千葉省三作(大正14)は、それぞれ大人によって、暑中休暇中の子どもたちの生活が活写され、特色深い児童読物たりえている点で注目させられる。明治中期・明治後期・大正後期それぞれに日記形式(2)(3)によって子どもたちの生活と心情とが精緻に描かれているのも新しい試みであった。

五

(4)「ぼくの太平洋大航海」岡本篤著 昭和55年3月1日 講談社刊

「ぼくの太平洋大航海」は、小学校六年生の岡本篤少年がお父さん(卓也氏)とともに、昭和五年(一九七九)の夏休み(七月二日〜九月一日)を利用して、一本マストのヨット(アルビレオ号)に乗って太平洋を横断した時の、淡路島の洲本港からサンフランシスコ港までの五六日間の航海日誌を収めたものである。

岡本篤少年の「航海日誌」は、次のように始められている。

七月二十二日(日) 第一日め 晴れ

今日は、太平洋横断の出港の日だ。きのうからぐっすりねたせいか、気持ちがいい。出港の前にお母さんに電話をかけた。お母さんの声をきいていると、なつかしく思えて、思わずなみだがこ

みあげてきて、電話のぼくの声は、なみだ声で話していた。けど、まわりに人がいるので、なきはしなかったが、鼻水がさかんにでてる。

いよいよ出発なので、はなをかんで、なみだが出るのをこらえた。

九時ちようど、ぼくと父をのせたアルビレオ号は、洲本のサントピアIIマリナーをでた。たくさんの人々がきてくれていた。アルビレオの人たち、新聞社の人たち、テレビ局の人たち、ほんとうにありがとう。

おきへでても、みんながアルビレオ号を中心にモーターボートや、ほかのヨットで見送ってくれた。ほんとうにうれしくて、悲しかった。音楽も「蛍の光」だったので、よけいに悲しくなっていた。しばらくいっしょに、みんなも走ってくれた。そのとき、ぼくの心は悲しみでいっぱいだった。とくにお母さんの顔を思い出したびに、人がこいしくなると、お父さんと二人だけではさびしい。お母さんも、いっしょにつれてくればよかった、と思った。しばらくバス(寝台)にこもり、お母さんの写真をみて、一人でないてしまった。もう、ヨットで横断なんかやめて、そのままどこかの港に入って、家へかえろうと思った。だけど、ここまできれば、後にひけないと思ったので、悲しくてもがんばることにした。

日記をつけていても、なみだがあふれでて、なきながら書いた。今日は、ほんとうに悲しく、さびしい一日だった。(同上書、一八二〇ページ)

また、八月六日(月)の日誌は、次のように記されている。

八月六日(月) 第十六日め 晴れのちくもり

今日は、午前十時に起床である。「ああ、すっかりねぼうしてしまった。」と、つぶやく。すぐに、朝食にとりかかる。今日はおかゆ。とてもおいしい。外をみると、太陽がきらきら。食後、せんたく物をほした。気温二十七度、水温二十二度。きのうとかわっていない。ぼかぼかして、気もちがいい。

父の天測によれば、現在位置、北緯三十九度三十四分、東経百五十一度三十四分だそう。昼食はなし。午後三時は無線の時間。今日も、海上移動局だけ。夕方、風波強まり、風向南西、風力五、風速十〜十二メートルぐらいで、平均時速六・三ノットと速い。気圧千十六ミリバールと低く、風浪階級四。それで、メーンセール(主帆)をすこしリーフ(まきあげる)し、ゼノアゾプセール(三角帆)をNO・2ゾブにかえた。

夜になって、とうとうあらしになり、ワッチしていたらしおがかかって、あわれぬれねずみ。もうれつに寒い。魚をつるためにしかけておいたぎえを引っぱってみると、糸がちぎられていた。それで、新しく作り直しておく。夜食は、朝ののこりのおかゆ・バター・あめ。(同上書、六二〜六三ペ)

また、九月六日(木)の日誌は、次のように記されている。

九月六日(木) 第四十八日め 晴れのちくもり

もう、シスコに到着間近なので、朝から、しゃれて、キャビン(船室)の大そうじと、食器あらいをした。とても気もちがよかったが、寒い。

近ごろ、父よりも、ぼくがヘルム(かじ)をとって時間が多いことに気づく。ふつうの人なら、おもしろそうに、楽しくやる

はずが、ぼくは、どうもヘルムをとるのが、いやになってきた。その理由の一つは、あんまり長くやっていて、たいくつなときがついたので、あきたこと。もちろん、たいくつでないときもあるが、それでも、あきてきたみたい。もう一つは、この船の、ウインドベーン(自動風力操舵装置)が、不完全なために、毎日かならずヘルムをとらなければ保針できないし、たまたま、なぎや向かい風にあっても、へとへとにつかれて、宿題や読書が、自由にできないことである。

今日は、本を二さつ読んだ。「舵」という、ヨット・モーターボートの雑誌と、神田真佐子という人が書いた、「アストロ号日本一周航海記、ふたりだけのヨット旅行」という本だ。まず、「舵」というのは、ヨットやモーターボートの記事を主体にした雑誌で、読んでいておもしろい。つい熱中して、ついには、ヨットってなんのためにあるのだろう、と思ひ、しんけん考えた。結局、「考えるのは、明日にしよう。」ということにした。

「アストロ号日本一周航海記」にでてくるのは、ある夫婦が、夫の退職金でヨットを買い、日本をまんゆうしながら一周する航海で、なんといつても、この航海記を書いた日記のうまいこと。感心して読んでいたら、自分の日記がいちばん下手に思えて、情けなくなってくる。(同上書、一三四〜一三六ペ)

岡本父子の一本マストのヨットによる太平洋横断は、国際児童年にちなんで、父親のわが子への思いやりによってなされた壮挙であった。篤少年が航海日誌を毎日つつけて、五六日間の横断記録を完成させたことも、わが国の学童暑中休暇史上最も大きい快挙であるといえる。前掲の七月二十二日(日)の第一日めの日記には、子

どもらしく別離の悲しみに沈んだ様子が述べられているが、第二日めから第五十六日めまでは、ほんとうに生き生きと航海中のことが描かれている。単なるメモ日記ではなくて、父と子による生活が一個の読物としても読めるように述べられている。

岡本篤少年は、航海中に、「アストロ号日本一周航海記、ふたりだけのヨット旅行」（神田真佐子さん）を読んでおり、「太平洋ひとりぼっち、世界一周ひとりぼっち」（堀江謙一著）なども読んでいて、航海日誌の書き方について啓発を受けている。

この「ぼくの太平洋大航海」は、航海日誌ノート二冊、刊行に際し、誤字・脱字を改めたほかは、すべて原文のままという。篤少年の担任の先生は、クラス全員に徹底して書くことを指導し、毎日ノートになにかを書いて提出させ、翌日は必ずそれに講評をつけて返されたという。

「天声人語」（「朝日新聞」昭和54年10月5日）は、この航海日誌について、次のように述べている。

「少年は、書くことを苦にするどころか、むしろ喜んで、毎日ノートに向かっていて、読んでいて、その喜びが伝わってくる。ではなぜ、書くことが喜びになったのか。／話しかける相手は父一人しかない。取りまくものは海。いわば無の空間だ。見、聞き、話す、その行為が、孤絶してしまったとき、書くということが、大きな喜びになってくる。日記には少年の覚えた多くのことばが、わきでるように、自由に使いこなされている。」

六

岡本篤著「ぼくの太平洋大航海」（昭和55）は、学童による暑中

休暇日誌（航海日誌）として、典型をなしているとみられる。大人による虚構的な取り組みから子ども自身による行動を通しての取り組みへ、前掲(1)から(4)への各種暑中休暇日誌に児童文章の生成過程の一面をうかがうことができよう。

（昭和59年6月7日稿）

— 広島大学教育学部教授 —